

日本学士院賞 受賞者

奈良澤 由美



専攻学科目 西洋中世考古学・美術史

生年 昭和四〇年 八月
略歴 平成元年 三月

東京大学文学部美術史学科卒業

同 四年 三月

東京大学大学院人文科学研究所修士課程修了

同 五年 四月

東京大学文学部助手

同 九年 九月

フランス・エクス＝マルセイユ第一大学古代・中世考古歴史文明研究科 DEA（専門研究課程修了証書）取得

同 二〇年一二月

博士（考古学）エクス＝マルセイユ大学

同 二一年一二月

フランス・エクス＝マルセイユ大学中世近世地中海考古学研究所客員研究員

同 二三年 八月

国立西洋美術館学芸課リサーチフェロー

同 二四年 六月

東京大学大学院総合文化研究科・グローバル地域研究機構特任研究員

同 二八年 五月

城西大学客員教授

同 二八年 九月

城西大学現代政策学部准教授

同 二九年 四月

城西大学現代政策学部教授（現在に至る）

博士(考古学) 奈良澤由美氏の *Les autels chrétiens du Sud de la Gaule (I^{er} - XII^{es} siècles)*
『南ガリアのキリスト教祭壇 五世紀から一二世紀まで』に対する授賞審査要旨

古代ローマ帝国が崩壊し、これに続くヨーロッパ中世世界がその文化と社会を形成するにあたって、最も重要な要素となったのがキリスト教であったのは自明と言ってよい。西暦四世紀にキリスト教が公認の宗教となり、教会において典礼が実施されると、キリストの象徴であり、司祭が聖餐の儀式を執り行う祭壇は、教会にとって欠くべからざる「装置」となった。本書 *Les autels chrétiens du Sud de la Gaule (I^{er} - XII^{es} siècles)* (南ガリアのキリスト教祭壇 五世紀から一二世紀まで) (プレボルス出版、二〇一五年) は、ローマ支配時代の古名を用いて「南ガリア」と称される地中海沿岸地方に残る、古代末期から中世盛期にかけて造られた教会祭壇の学界初めての包括的研究である。

南ガリア地方の当該時代のキリスト教祭壇の研究は、一九世紀中頃のマルセイユ地方に残る祭壇についての L. T. ダシーの研究を嚆

矢とし、二〇世紀に入りより科学的で精緻な手法による研究が蓄積されてきたが、いずれも比較的限られた地域を枠組とする研究であった。奈良澤由美氏の業績の特筆すべき点は、研究対象をプロヴァンス地方、ラングドック地方、ローヌ＝アルプ地方の三地方、総数一一県にまたがる地域に設定し、こうすることで南ガリア中心部全体についての所見として、その成果を提示することができたことである。その意味で同氏は南ガリアという限られた空間に関して、キリスト教祭壇の様式上の歴史的発展について、堅固な資料基盤をもとに初めて全体像を提示して見せたことになる。このことは斯学の専門誌『*Medieval Archaeology*』(第六〇巻第一号、二〇一六年) 掲載の書評が、本書を「今後の地域研究の大いなる出発点である」と極めて高く評価しているところにも表れている。

全体で六〇四頁からなる本書の本文部分は、「序論的考察」、「第一部。祭壇カタログ」、「第二部。総合的考察と結論」の三部から構成されている。

「序論的考察」では、教会祭壇を造るにあたって素材(大理石など)や形態について、教会法がどのように定めてきたかなどの歴史的考察や、先に述べた研究対象の地理的空間の設定、祭壇を含む典礼道具についての歴史家の関心の変遷、教会祭壇の保存の現状などが叙述される。

「第一部。祭壇カタログ」は分量の上で最も大きな部分を占めている。ここでは総数四五四点の祭壇及びその関連遺物が、予め定められた項目ごとに一点一点記述される。その項目とは、形態、素材、規格、装飾や意匠、先行研究、関連文献などである。一点ごとに写真、実測図、著者自身による祭壇についての観察記述、碑文の模写・翻刻、意匠の模写などが付され、その構成は精緻を極めている。それは「もの」に対する感覚的認識、経験に基づく直感的な把握が、多様である「もの」としての個々の祭壇への理解を育むと信ずる著者の思想の表れであり、経験科学である美術考古学の根底にそなえるべき認識の在り方であろう。

他方において美術考古学の対象としての祭壇研究がもつ独特の隘路もまた忘れてはならない。それは総数四五四点という多数の調査観察にも拘わらず、それが果たしてどれだけの網羅性、悉皆性をそなえているかを検証する術がないという点である。そのことは研究の指導をおこなったミシェル・フィクソ教授が指摘している「*ありそうにない網羅性 exhaustive improbable*」という言葉に現れている。過去にどれだけの数の教会祭壇が、この時代にこの地方で製作されたかを知ることができない以上、完全な網羅性を主張することはできないのである。しかしフィクソ教授のこの言明は、著者の近似的な網羅性を擁護する文脈での揚言であることも指摘しておかな

ければならない。重要なのは本カタログが、失われていく文化遺産を記録する国際的取り組みとして位置付けられる点である。

「第二部。総合的考察と結論」は、「祭壇カタログ」において逐一精査した四五四点の作品全体を通して、多様な論点についていかなる結論を演繹しうるか、本研究に寄せた著者の学問的考察の根幹をなす部分である。

著者はまず施された彫刻装飾に応じて、祭壇を以下の四つに分類する。すなわち①プロヴァンス型装飾祭壇、②古代墓石式祭壇、③地中海ラングドック地方の卓に円形葉装飾が施された祭壇、④前面飾り祭壇（アンテペンディウム *antependium*）である。①はパレオクレティアン（古キリスト教）時代にまで遡り、サン・ヴィクトール・ド・マルセイユ修道院祭壇が代表例（キリストを表す組文字クリスモン、鳩、葡萄枝飾り、雌羊などの寓意彫刻）である。マルセイユ近郊の工房からプロヴァンス地方全体に広がり、ロマネスク時代まで長期にわたって製作された。特徴的なことに、七世紀から一〇世紀にかけての作例が欠けている。②は古代の墓石を利用した祭壇。作例の多さでプロヴァンス地方が圧倒しているが、八、九世紀になるとラングドック地方でもこの種の作例が見られるようになる。頂上部には聖遺物収納のための小穴が穿たれ、正面にはギリシア十字架が施されている。著者はこのラングドック地方のそれが西

ゴート芸術の影響を受けており、カロリング時代初期のナルボンヌが製作の中心であったと推測する。③円形葉裝飾祭壇は一〇、一一世紀にラングドック地方やカタルーニャで見られ、祭壇の卓が掘り込まれ、縁辺部が円形葉様に縁高に残されている様式である。年代確定が困難な作例については古キリスト教時代とする者、ロマネスク時代とする者など、研究者の間で見解が大きく分かれている。④アンテペンディウム型とは、外陣や信徒席に向かって、祭壇の前面を覆うように懸けられる布、あるいは金属製や木製の裝飾を具えた祭壇のことである。この様式は一二世紀にプロヴァンス地方とラングドック地方、ローヌ＝アルプ地方の対象地域全域に見られる。

これに続く「類型論と編年論」では、祭壇の卓とその支持躯体、すなわち台座とそこに穿たれた聖遺物収納開口部 (*loculus*) などが考察される。卓は二類型に分類される。すなわち縁を少し高く残した掘り込み形態と、平面型である。前者は古代の食卓の系譜を引いており、マルセイユのサン・ヴィクトール修道院のものが典型であり、五―七世紀に属する作品がプロヴァンスで一五例確認される。ブレ・ロマネスク時代になるとこの形態はラングドック地方で盛んに作られるが、プロヴァンス地方ではあまり目立たない。平面卓は合わせて八〇例知られ、小規模で農村教会や修道院教会に多く、素材が大理石であるのはわずか三例のみで、その他は石灰岩製か砂岩製

である事実など、内容豊かな結論を引き出すことができた。ここで古代遺物など古い祭壇の「再利用 (スボリア)」の問題が論じられているが、それは著者がフランスのみならず、イタリア、チュニジアなど地中海地域での多くの発掘調査に従事した経験の成果といえよう。

著者はあくまで美術考古学の論理に忠実な分析に終始し、安易に歴史的知見を外挿することはしない。プロヴァンス地方が五三七年に東ゴート王テオダハドによりフランク王権に割譲されるまで、ラヴェンナを首都とした東ゴート王権の支配を受け、古代的な色彩を長く保持したこと、他方ラングドックは八世紀にいたるまで西ゴートの統治下におかれていたという歴史的事実を知るものにとつて、フランスの南北の対照性だけでなく、東西の対照性にも目を向けるようにとのフェルナン・ブローデルの指摘のもつ重要性を、本書は美術考古学の視点から傍証するのに成功した。そしてその交差点がローヌ川水域にあった事実も別出した。

古キリスト教時代に遡る祭壇様式の系譜や、十字架のイコノグラフィーの変遷についての考察が添えられたならば、祭壇の歴史をより深度をもって捉え得たのではないかとの望蜀の思いも去来するが、教会祭壇という典礼備品の分析を通して、その背後に潜む歴史文化の二つの伝統の射程を鮮やかに論証した著者の学問的達成に、まずは賞賛の言葉を送りたい。